10

富士川游と昭和前期の思潮
――1930年代後半を中心に――

土屋　　久
順天堂大学医学部医史学研究室

はじめに

本発表は，1930年代後半の富士川游（1865–1940）の著作にみられる人間形成論的な傾向を，当該する時代の思想的・文化的潮流との関係から考察することを目的とする．

1　1930年代後半の人間形成論的傾向

富士川の同郷の後輩で，哲学者の三枝博音（1892–1963）は，富士川を追悼した著作「富士川游先生」の中で，富士川のあらゆる思想に共通して，「人間」概念が強調され，その思索の究極のところには，いつも「人間」が立っていると指摘している．そして，その中でも特に，「『宗教の教養』一巻の特徴は，まさにその人間について，否，その人間になることについて叙述されてある」と述べる（1973『三枝博音著作集』第四巻）．ここに挙げられる『宗教の教養』は，1938年に出版されたもので，1935年，1941年出版の『宗教の心理』，1937年出版の『医術と宗教』，また，1936年から1941年にかけて出版された『新撰妙好人伝』一四編とともに，富士川晩年の宗教思想が開陳された著作である．『宗教の教養』のみならず，この著作群全体に，「人間になること」がモチーフの一つとして語られている．

全著を具体的にみていく紙数もないので，一，二点の指摘をおこなっておくと，まず『宗教の教養』では，富士川は，次のように述べている．「宗教の教養とは何ぞや．この問題に対して簡単に答えて言えば，それは永遠の価値を有するところの人間を造り上げることに帰著するのである」．また，『医術と宗教』では，済世恵人を目的とする医家は，殊に，内観を深くし，宗教の心をあらわすことの重要性が説かれる．

このように，宗教的な人格形成の必要が富士川の最晩年の著作に一つの主題として現れているのである．

2　1930年代の思想的・文化的潮流――教養主義

一般に教養主義というと，大正時代の思想的・文化的潮流と考えられているが，1930年代には，教養主義が復活をみせる．1935年，社会思想家の河合栄治郎（1891–1944）が『学生に与う』を著し，それが好評を博したのを機に，翌年から41年にわたって，河合を編者に『学生叢書』全十二巻が刊行される．ここに，教養に関する議論は近代日本空前のものとなり，社会科学者，自然科学者を含む，多くの領域の学者や知識人が自身の教養を語り，教養に関する議論に参加し，人格や人間の形成が盛んに唱えられた（竹内洋　2003『教養主義の没落』中央公論社，渡辺かよ子　1997『近現代日本の教養論』行路社）．

先にみた富士川の著作群も，こうした流れの中に位置づけられると考えられる．

いうまでもないことだが，富士川は，真宗の熱心な信仰者であり，単なる研究者ではない．三枝のことばを借りるならば「劇悪極苦」の生活の中で体認された宗教の精髄が，彼の学的研鑽や教育者としての資質，そして昭和教養主義の風潮と相俟って宗教の立場からの人間形成を考える一群の著作に繋がっていったと考えられよう．

おわりに

本発表では，富士川游最晩年の人間論的傾向には，同時代の教養主義の影響があったことを示唆した．その構造上の特質についての考察は，今後の課題とし，別の機会に発表乃至論考としてまとめたいと考える．